

## 「シェイクスピアの妹たち」

ヴァージニア・ウルフと左川ちかの生を書くこと

金井 彩香

ヴァージニア・ウルフは、エッセイ「いかにそれは現代人を撃つか」(“How It Strikes a Contemporary,” 1923)において、現代では文学作品は一貫した評価をうけることができず、作家は他人の目という制約のもとで作品を書いていると嘆く。左川ちかが数多くのウルフ作品の中からこのエッセイを選び、翻訳していることは、左川自身の同様の苦悩を示唆するものといえるだろう。ウルフは、小説『フラッシュ』(*Flush*, 1933)において、スパニエル犬フラッシュの視点から詩人エリザベス・バレット・ブラウニングの人生の一幕を語ることによって、そうした女性作家の不遇を糧として自らの作家世界をうみだす過程を描いている。ウルフの技巧は、生を形づくる日常の印象を観察し、男性の規範の外にある女性の精神を通して具現化することを目指しており、それは、ウルフと左川を抑圧されてきた女性作家の象徴「シェイクスピアの妹」として結びつけるものである。

ウルフは「いかにそれは現代人を撃つか」において、絶対的な評価を下す偉大な批評家が不在である現代において、作家や読者が困惑している状況を指摘している。このような批評に対する不安や不信感は、ウルフ自身だけでなく、左川ちかにも共通するものであった。エリカ・デルサンドロは、1930年代のウルフが「女性モダニスト」という限定的な評価にとどまり、彼女自身がジュディス・シェイクスピアのような存在であったと指摘している(1)。同様に、左川ちかも批評の場で正当な評価を得ることが難しく、「その詩の新しさを詩の歴史の中の出来事として受け止め得る男の詩人はいなかった」とされる(富岡 78)。このような状況の中で、ウルフは批評に対する不信感が広がる時代において作家が信念を持つことの重要性を強調し、自分の印象が他者にも通じると信じる必要があると述べている(238)。ここでウルフが言う「印象」とは、瞬間的な印象を捉えることで生の本質を描き出すことを指す(“Modern Fiction,” 1925)。この考え方は、左川の詩作における「現実には反射させた物質をもう一度思惟の領土にまで戻した角度から表現すること」(205)と共通している。ウルフと左川は、創作において物事や人生を単一の視点で捉えるのではなく、多様な視点や印象を取り入れ、それを作品に反映させることの重要性を繰り返し強調している。

ウルフは、『フラッシュ』において、犬のフラッシュの視点による印象や経験の描写を通してエリザベスという女性作家像を形成し、その経験を明らかにすることを試みている。左川と共通するこうした語りの媒体としての「人間でないもの」は、女性が「永遠の他者」であることを期待されるなかで表現するための「仮面」といえよう(鳥居「1930年代モダニズム詩」16; 『「人間ではないもの」』82-83)。実際、ウルフにとっての『フラッシュ』は、「自己表現の創作(a work of self-revelation)」であった(Bell 175)。ウルフと左川は、動物という他者化した存在を通すことによって自身の声を伝えることを実践する。

小説は、1842年の夏頃、フラッシュがロンドンのウィンポール街にあるバレット家に迎えられ、エリザベスとともに過ごした10年余りを描いている。病気がちであったエリザベスは、1846年にロバート・ブラウニングと結婚するまで、ほとんどの時間を寝室で過ごした。ウルフは、この『「カゴの鳥」の生活』(DeSalvo 286)を象徴する寝室を「緑色を帯びた部屋」として描き、エリザベスの代表作『オーロラ・リー』(*Aurora Leigh*, 1856)の主人公オーロラの部屋と重ねている——“Aurora herself was blessed with a little room. It was green papered, had a green carpet and there were green curtains to the bed, as if to match the insipid greenery of the English countryside. There she retired; there she read” (“Aurora Leigh” 205)。エリザベスに、女性らしくあるべきだという重圧に苦しむ一方で、強い意志を持つ女性作家として描かれるオーロラを映し出すことで、エリザベスという作家の本質を浮かび上がらせる。

一方で、フラッシュの視点は、エリザベスの女性作家としての歩みの不確かさをもまた象徴的に描く。デイドラ・デイビッドは、「バレット・ブラウニングが女性詩人の先人を探そうとすると、誰も見つけることはできなかった」と指摘する(484)。エリザベスが経験したであろう不安は彼女の寝室に投影される。フラッシュが見るこの部屋にある物はすべて実体を持たない——“... everything was disguised. . . Nothing in the room was itself; everything was something else” (16-17)。そして鏡は、家具や詩人の胸像をさらに歪め現実を変えて映す——“Looking-glasses further distorted these already distorted objects so that there seemed to be ten busts of ten poets instead of five; four tables instead of two” (17)。フラッシュの不完全な寝室の描写は、1840年代のエリザベスの「女性詩人」としての活躍に内在する不安定さを象徴する。

さらにウルフは、犬という動物の非言語性を、言葉によって印象を書くという創作の問題に重ね、物語に投

影している。フラッシュの言語理解の問題をその感覚や印象の受容と関連付けて考えると、それはウルフの主張する創作行為そのものの問題を導き出すだろう。小説をとおして、エリザベスとフラッシュの関係は、言語では伝えきれない親密さをもつ。ウルフは、「病むことについて」(“On Being Ill,” 1930)において、病人の健康なときより研ぎ澄まされる感覚に着目する——“In illness words seem to possess a mystic quality” (201)。そうした病人の経験する言葉の神秘性、そして言葉で言い表すことの限界への挑戦は、「言葉で意思を通じあうことができなかった」としながらも、「特別な親密さを生む」(27)というエリザベスとフラッシュの関係性に重ねられる。また、フラッシュが言葉を理解せず、文字が読めないにも関わらず、状況や感情を理解できること——“Flush could not read what she was writing an inch or two above his head. But he knew just as well as if he could read every word...” (36–37)——は、言葉の限界を逆説的に示しているといえよう。動物が言語を理解するかの問題について、ジェイン・ゴールドマンは、「動物の目を持つことは、通常の意味で読むのではなく、異なる方法で読むこと、あるいは身体的に読むことかもしれない」と説明する(171)。そうした「身体的に読むこと」こそが、ウルフの主張する「心」で受け止めるような印象の捉え方を可能にするのである。

小説の結末では、エリザベスとフラッシュが同一視されると同時に、彼女が人間であり、フラッシュが犬であるという根本的な違いが強調される。「夫人の顔の大きな口、大きな眼と、豊かな巻き毛は、奇妙なことに今もフラッシュの顔に似ていた」(105)という描写は、二者の共通点と相違点を暗示する。ウルフは、フラッシュの存在を通じて、言語の限界やその不完全さを象徴的に描き出し、印象や断片による表現の可能性を模索したのである。

『フラッシュ』において、ウルフは、批評にさらされる女性作家としての立場から、印象を描くことが創作における重要な信念であることを示している。物語は犬の視点を通して語られ、その仮面性を通じて女性作家が直面する経験を明らかにする。同時に、印象の描写そのものが女性作家の経験を語る方法であることを強調している。さらに、ウルフは犬という媒介を用いることで、印象の受容や非言語的な表現の問題を創作の一部として描き、言語の限界を逆説的に示している。ウルフが『いかにそれは現代人を撃つか』で訴える作家の信念は、印象の描写を通じて物語を生み出すだけでなく、その創作行為を通じてウルフと左川のような女性作家たちを結びつけるのである。

## 引用文献

Bell, Quentin. *Virginia Woolf: A Biography*. Vol. 2, Hogarth Press, 1972.

David, Deidre. “From Intellectual Women and Victorian Patriarchy.” *Aurora Leigh: Authoritative Text, Backgrounds and Contexts, Criticism*, edited by Margaret Reynolds, W.W. Norton, 1996, pp. 484–93.

Delsandro, Erica. “To Readers: 1930s Woolf.” *Virginia Woolf Miscellany*, no. 87, Spring/Summer 2015, pp. 1–3, <https://viriniawoolfmiscellany.wordpress.com/>.

DeSalvo, Louise. *Virginia Woolf: The Impact of Childhood Sexual Abuse on Her Life and Work*. Ballantine, 1989

Goldman, Jane. “Flush: A Biography Speaking, Reading, and Writing with the Companion Species.” *A Companion to Virginia Woolf*, edited by Jessica Breman, Wiley Blackwell, 2016, pp. 163–75.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. New edition edited by Anna Snaith, Oxford University Press, 2015.

———. ““Aurora Leigh.”” *The Second Common Reader*, edited by Andrew McNeillie, Harcourt, 1986, pp. 202–13.

———. *Flush*. Edited by Kate Flint, Oxford World's Classics, 2009.

———. “How It Strikes a Contemporary.” *The Common Reader*, Harcourt, 1984, pp. 231–41.

———. “Modern Fiction.” *The Common Reader*, edited by Andrew McNeillie, Harcourt, 1984, pp. 146–54.

———. “On Being Ill.” *The Essays of Virginia Woolf, Volume V: 1929–1932*, edited by Stuart N. Clarke, Houghton Mifflin Harcourt, 2009, pp. 195–208.

左川ちか「魚の眼であつたならば」『左川ちか全集』, 島田龍編, 書肆侃侃房, 2022年, pp. 204–206.

鳥居万由実「1930年代モダニズム詩における、女性の自己表現の方策: 左川ちか、山中富美子らの作品を手がかりにして」『言語態』, 第15号, 2016年, pp. 7–28.

———. 『「人間ではないもの」とは誰か——戦争とモダニズムの詩学』 青土社, 2023.

富岡多恵子「詩の誕生」『左川ちか論集成』 川村湊, 島田龍編, 藤田印刷エクセレントブックス, 2023年, pp. 69–83.